

住宅における住意識調査

中島 一・松本 壮一郎

A Research for The Living Concious in The Dwelling House

Hazimu NAKAZIMA, Souichrou MATUMOTO

今回おこなった住意識調査は、諸条件の変化により生まれた現代人の生活心情の変化に対応する今後の住宅のあり方を求めようとするものです。調査は、空間におよぼす生活意識変化の要因より「住宅を形成する基本概念、をとらえ、住宅への希望、室の雰囲気への希望、生活様式、両親との同居・別居、子供と両親との生活、家族員相互の独立と交流などの意識に関する質問から構成した。今回は「内部空間に対する副次的な諸要求の分析、プライバシーとコミュニケーションの現状分析、の2点を研究した結果を報告する。

1. はじめに

戦後、急速に発展した経済的・社会的諸条件の変化による環境条件の変化は、生活の各方面に数多くの変化をもたらしてきた。

昭和45年国民生活白書*には、生活意識の変化について「都会的意識の浸透」「物質的価値観から精神的価値観への移行の萌芽」などを上げている。これらは、戦後の個人中心と合理的な考え方からくる生活観や、精神的な豊かさを求める生活観の現われであると思われる。

本研究は、先の「住意識調査結果の概要、**および住宅への希望、*** についての報告に引き続くものであり、経済的・社会的諸条件の変化により生まれた現代人の生活心情の変化に対応する今後の住宅（住意識）のあり方を求める基礎的な調査研究である。

今回は内部空間に対する副次的な諸要求の分析、プライバシーとコミュニケーションの現状分析の2点について報告する。

2. 調査の対象および方法について

〈調査対象地域・対象戸数〉

対象地域は、名古屋市の住居専用地域である千種区、瑞穂区・昭和区より、表1のような1.2Kmのグリッドを引き決定した。対象戸数は昭和43年10月の住宅統計調査に基づく名古屋市内住居形式別戸数****より、市内総戸数の0.1%にあたる487戸を住居形式別に比例配分し、対象戸数を決定した。

〈調査方法〉

調査は、質問紙調査法（留置法）により行なった。質問回答対象者は住宅のマネジメントとしての主人と主婦とし、各家庭に質問紙を2部づつ配布し、回答者に直

表1 対象地域

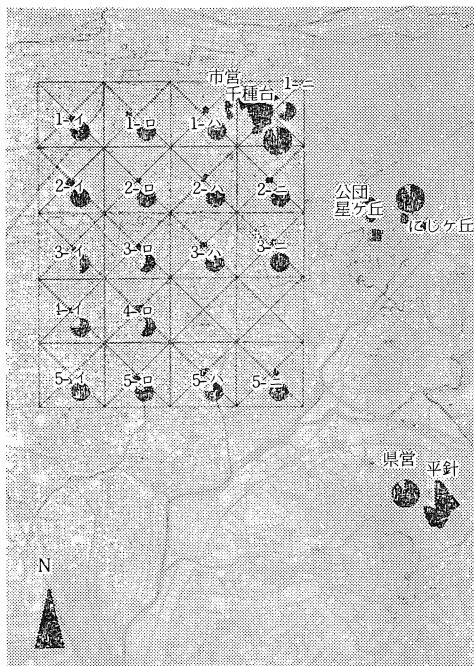


表2 対象戸数とその回収率

住宅形式	対象戸数	回収率	備考	
独立住宅	221	78.3%	比較的環境の整備された千種区・瑞穂区・昭和区より、19ヶ所を選び行なった。	
連続住宅	103	63.1%	千種区・瑞穂区・昭和区より6ヶ所、無差別抽出により行なった。	
集合住宅	市営	45	88.9%	千種台団地（千種区）…昭和24年から建設され、現在では2000戸を越え市営最大の団地
	県営	27	88.9%	平針団地（昭和区）…既設住宅地から離れた市郊外に建設され団地専用の諸施設完備。
	公団	40	90.0%	星ヶ丘・虹ヶ丘の各団地、3234年から建設、571、1568戸を有し、市内でも高級住宅団地を形成
	社宅、公舎	24	100.0%	市営、県営、公団の各団地に隣接。
	民間	27	92.6%	市営、県営、公団の各団地に隣接
小合計	163	90.8%		
合計	487	79.3%		

接記入を依頼した。なお、質問は現状と意識のずれについて知るために、同一内容の質問に対し「現状」、「希望」、「あるべき姿」の3つの設問方法をとった。

〈調査日時〉 昭和45年10月10～25日

〈対象者の概要〉

対象者年齢は、80%以上の者が26～45才で、主な職種は主人が専門的・技術的従事者、管理的従事者、事務従事者であり主婦はほとんどの者が家事従事者であった。

また、住居環境については、表3の通り平均より比較的恵まれた住居環境のもとに生活していることがわかり、回収率・年齢・職種・生活程度の充実感などから生活に張りを持った若い教養人であると判断できる。

表3 調査対象者の概要

	独立住宅	連続住宅	集合住宅	まとめ
家族形態	65.8%の者が夫婦家族。	58.1%の者が夫婦家族。	93.4%の者が夫婦家族。	76.7%の者が夫婦家族。
平均家族数	3.9人	4.0人	3.7人	3.8人
入居年数	60.6%の者が11年以上。	55.8%の者が11年以上。	3～5年の者が26.5%、 1年未満・1～2年 6～10年の者が約 23.3%で同率	11年以上の者が 29.1%、 3～5年の者が16.4%、 6～10年の者が 20.6%
持家率	66.1%の者が持家	36.3%の者が民間借家 30.1%の者が持家	(住宅統計より比例配分)	56.4%の者が持家 (集合住宅を除く)
平均部屋数	5.5室	4.4室	3.1室	4.4室
生活程度	実際の水準は別として、約60%の者が「現在の生活に充実している」と答えている。			

一資料一

名古屋市全域における数値
(昭和43年住宅統計より)****

平均家族数 4.0人
持家率 40.8%
1住宅の平均部屋数 3.54室

3. 調査結果と考察

3.1. 内部空間に対する副次的な諸要求の分析

住宅の内部空間に対する副次的な諸要求については種々上げられようが、ここでは「居室の雰囲気」「生活様式」「親との同居・別居」「子供との生活の独立」「家族間の独立性及交流」についての「希望」に関する調査結果について報告する。

1) 各居室の雰囲気への希望

表4は、居間・夫婦寝室・子供室に対する雰囲気への希望を、12の回答項目より3つずつ選択してもらい、その回答を累積したものである。

希望の高いものを見比べると、3室の共通点は「暖かさ」以外認められない。しかし、居間において高い指数を示すものは、夫婦寝室か子供のどちらかで比較的高い数値を示しており、居間が夫婦寝室と子供室との接点になることがわかる。

夫婦寝室に「暖かさ」「静閉」「落ち付き」「独立性

」を求めるのは、個室に職場や隣家との交流、子供の育児などの煩わしい諸問題から切り離れた落ち付きある安らぎを求めている結果と解され、また、子供室に「暖かさ」「落ち付き」「開放感」「独立性」を求めるのは、子供の成長に対する親心を現わしているためと思われる。このことより、この2室に共通する「独立性」の意味することはやや異なり、夫婦寝室は内へと閉じた雰囲気、子供室には閉じた所から外へと開いた雰囲気を希望していることがわかる。

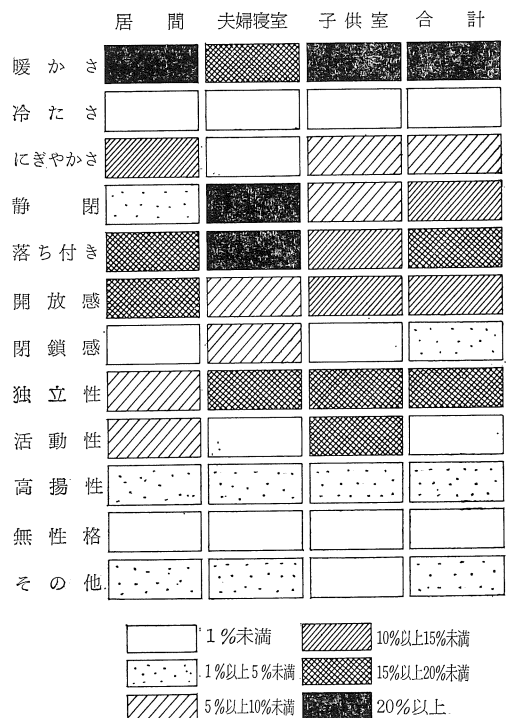
3つずつ選ばれた回答を1グループとして集計すると、居間では「暖かさ・にぎやかさ・開放感」夫婦寝室では「静閉・落ち付き・独立性」子供室では「暖かさ・開放感・活動性」のグループが一番多い。このことから、プライベートな夫婦寝室・子供室には「独立性」を重要視し、家族間の接点となる居間には暖かい落ち付きのある開放的な雰囲気を求めていることがわかる。

2) 住生活形態からの分析結果

その他の各項に対する「希望」を主人・主婦別に集計すると表6～11のようになる。

生活様式について見ると「和洋折衷」が全体で60.0%と高い。このことは和式・洋式の長所を取り入れた生活様式を望むためと思われるが、これに続いて「こだわりたくない」「和式」に対する希望が多いことより、和式・洋式で形づけられる座式・椅子式などの生活様式では

表4 室雰囲気に関する項目より分類



なく自由度の高い生活様式を望むためではないかと思われ、し注目したい。
れる。

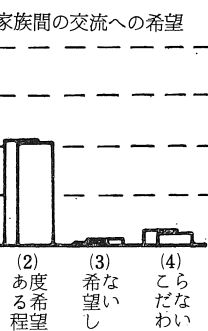
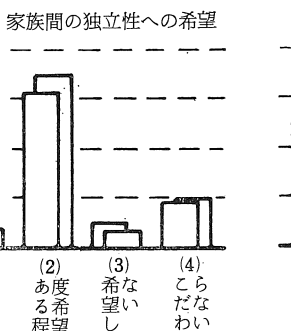
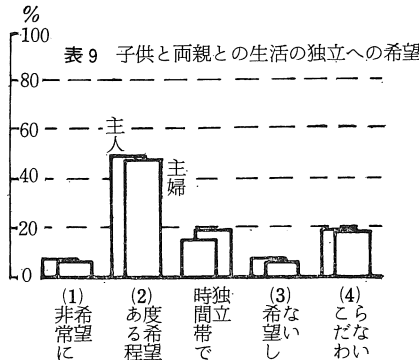
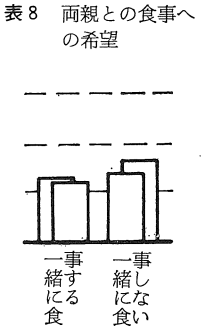
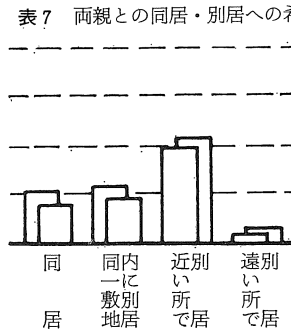
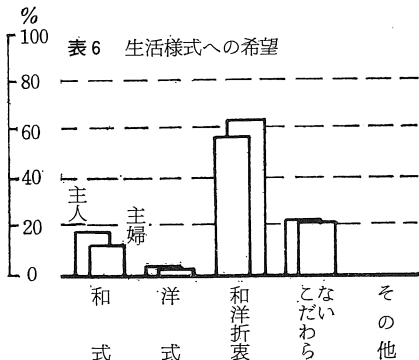
他の質問回答に強く現われている。夫婦の独立、への要望が、親との同居・別居においては、「同居」「同一敷地内に別居」「近い所に別居」に集まり、やや消極的であった。これは意識面における生活の独立を強く望んでいるためと思われ、意識面における生活の独立性は、距離にあまり関係なく、住宅における室の雰囲気・平面計画・配置計画などの工夫により、かなり解決できると考えられる。

家族員相互の独立や交流に対する希望の回答結果を見ると、子供と両親との生活については「ある程度独立を希望」、49.3%、家族員相互の独立については「ある程度独立を希望」、が66.5%、家族員相互の交流については「非常に希望」、が51.3%「ある程度希望」、が41.1%であった。このことは、都市的意識の浸透による核家族化の進展の現われの結果であると思われる、前項で述べた室の雰囲気における独立性重要視の傾向と一致

表5 居間、夫婦寝室・子供室の雰囲気への希望の相互関係

- 暖かさ
- 冷たさ
- にぎやかさ
- 静閉
- 落ちつき
- 開放感
- 閉鎖感
- 独立性
- 活動性
- 高揚性
- 無性格
- その他

居間	1.3.6	1.3.9	1.4.5	1.5.6	1.5.9	1.6.9	その他	夫婦	1.4.5	1.4.8	1.5.8	4.5.8	その他	子供	1.5.8	1.6.9	1.8.9	5.8.9	6.8.9	その他								
夫婦	2.9	1.1	2.9	3.0	0.4	0.6	4.2	夫婦	1.1	0.4	1.0	2.5	1.1	1.0	4.2	夫婦	2.5	1.0	0.2	3.6	0.2	2.3	4.9					
子供	4.4	1.3	0.4	2.9	0.8	2.7	6.3	子供	9.3	3.2	2.9	5.5	2.5	1.1	14.3	子供	2.3	0.4	0.4	2.7	1.1	1.5	3.6	1.3	1.3	4.2	1.5	3.6
その他	1.5	0.8	0.4	2.3	0.8	0.2	2.5	その他	1.3	1.0	1.0	2.3	1.9	2.3	その他	1.3	0.2	1.5	0.4	0.4	2.7	1.0	0.6	0.6	1.5	2.5		
その他	0.8	1.0	1.7	0.2	1.5	1.3	0.8	その他	0.8	0.4	0.2	2.5	1.1	1.4	その他	1.1	0.4	0.6	0.8	0.4	1.7	0.8	0.4	0.2	0.6	3.0		
その他	13.1	5.3	4.9	8.6	4.2	5.5	21.9	その他	9.7	7.2	8.7	12.9	24.9	その他														



3.2. プライバシーとコミュニケーションの現状

住意識から見たプライバシーとコミュニケーションについて調査項目より関連の深い5項目を取り上げ現状分析を試みた。

調査方法は「現状と意識のずれ」を始めとした表面的なものばかりではなく、回答者の内面に潜む真情的なものを追求するため同一項目に対して「現状」、「希望」、「あるべき姿」の3つの回答を求めた。

現実はどうであるが、今の私の希望としては
 [現状] [希望]
 こう望む。しかし、本来の姿としてはこう
 [あるべき姿]

あるのが本当だと思う。

1) 現状の概要

① 親との同居・別居については、その形式のいかんを問わず一応72.3%の者が別居であり、核家族化が進んでいることが分かる。「希望」においても、その傾向が一層強く、共同住宅住居者の「同居」希望者は主人・主婦とも10%以下であった。

② 子供と親との生活の独立については、「ある程度独立させている」が28.2%で最高であるが「独立させていない」「こだわっていない」と大差がなく、独立の傾向はあまり見られない。又、希望においても「完全に独立を希望する」は5.9%と、一般的に独立に対する積極的な傾向が感じられない。これは、室数の少ない連続、共同住宅住居者における「時間帯で独立を希望」が比較的多いことなどより、住居規模、形態などの既存の住宅事情が原因していると推察され注目したい。

③ 家族1人1人の独立性については「ある程度独立させている」に45.3%あり、「希望(69.8%)」、「あるべき姿(69.3%)」で更に高い数値を示し、内容の似た②と比較するとかなりの違いが見られる。このことより核家族化による世帯人員の減少が家族員の自由な個性発揮を可能にするが、親子の関係においては、この可能にもかなりの困難があると推察できる。

④ 家族員相互の交流においては「充分行なわれている(30.8%)」「ある程度行なわれている(57.7%)」とかなりの家庭において、家族員相互の交流が行なわれているといえよう。希望、あるべき姿でも同様の傾向が見られ「行なう必要はない」と答える者は1人もいなく注目したい。

⑤ 隣家との交流においては「挨拶程度」「立ち話し程度」に半数以上の者が集中し、家族員間の交流に比べほとんど行なわれていないと思われる。希望においてもこの傾向が強い。しかし、あるべき姿では「お茶を飲む

程度の交流」「行き来し会う」がやや高くなり、考えの上では交流の必要性を認めていると思われる。

2) 現状と意識のずれ(現状・希望・あるべき姿の一致・不一致より)

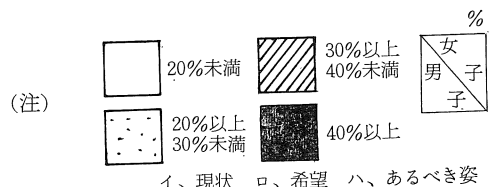
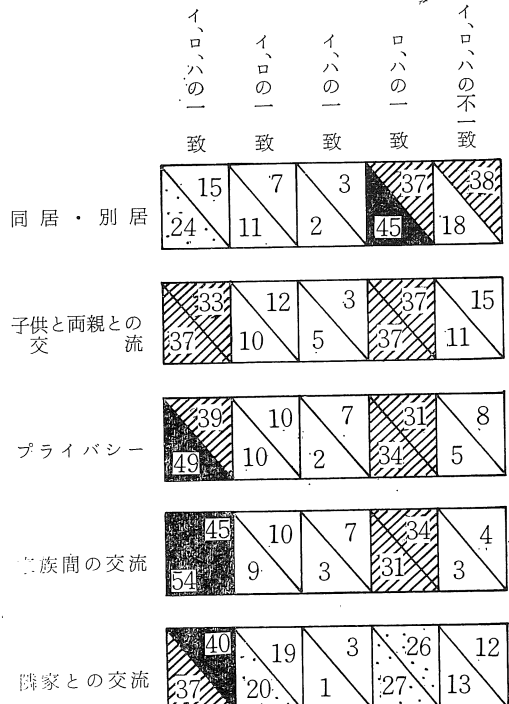
表12は、現状・希望、あるべき姿についての一致・不一致の各項別の相異点を、表13~17は回答内容からの一致・不一致を示すものである。

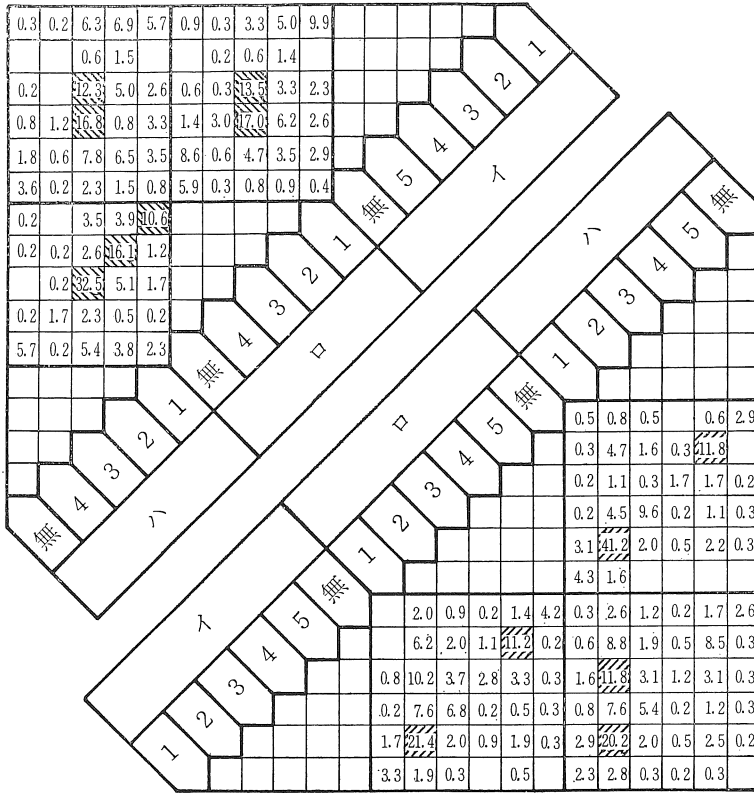
全体の傾向としては「現状・希望・あるべき姿」の一致と「現状と希望・あるべき姿」の不一致に集中し、前項の約50%に対し、後項の約35%の者に現状と意識のずれが現われている。

個々に見ると、次のことが読み取れる。

「親との同居・別居、ではやや全体の傾向と異なり「現状と希望・あるべき姿」「現状、希望・あるべき姿」の不一致、つまり、現状との意識のずれに約70%集まることになる。これは表3より、同一敷地内に別居、同居がかなえられない点に原因していると思われる。また、住居形式別に見ると共同住宅住居者の「子供と両親との生活の独立、に「現状と希望・あるべき姿」の不一致の傾向が他より強い。これは表14より「ある程度分離」

表12 「現状」、「希望」、「あるべき姿」の合致度





イ、現状
ロ、希望
ハ、あるべき姿

表13 両親との同居と別居におけるイ、ロ、ハの相互関係

1. 同居
2. 同一敷地内に別居
3. 近い所で別居
4. 遠い所で別居
5. 死別
- 無. 無回答

表14 子供の生活と両親との生活におけるイ、ロ、ハの相互関係

1. 完全に独立
2. ある程度独立
3. 時間帯で独立
4. 分離する必要なし
5. こだわらない

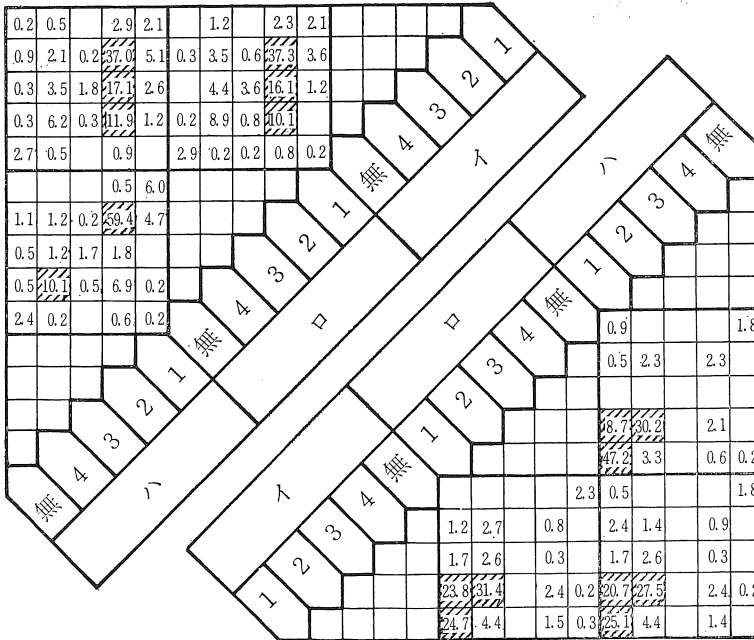


表15 家族間の独立性におけるイ、ロ、ハの相互関係

1. 充分保つ
2. ある程度保つ
3. 保たない
4. こだわらない

表16 家族間の交流におけるイ、ロ、ハの相互関係

(表15と同様)

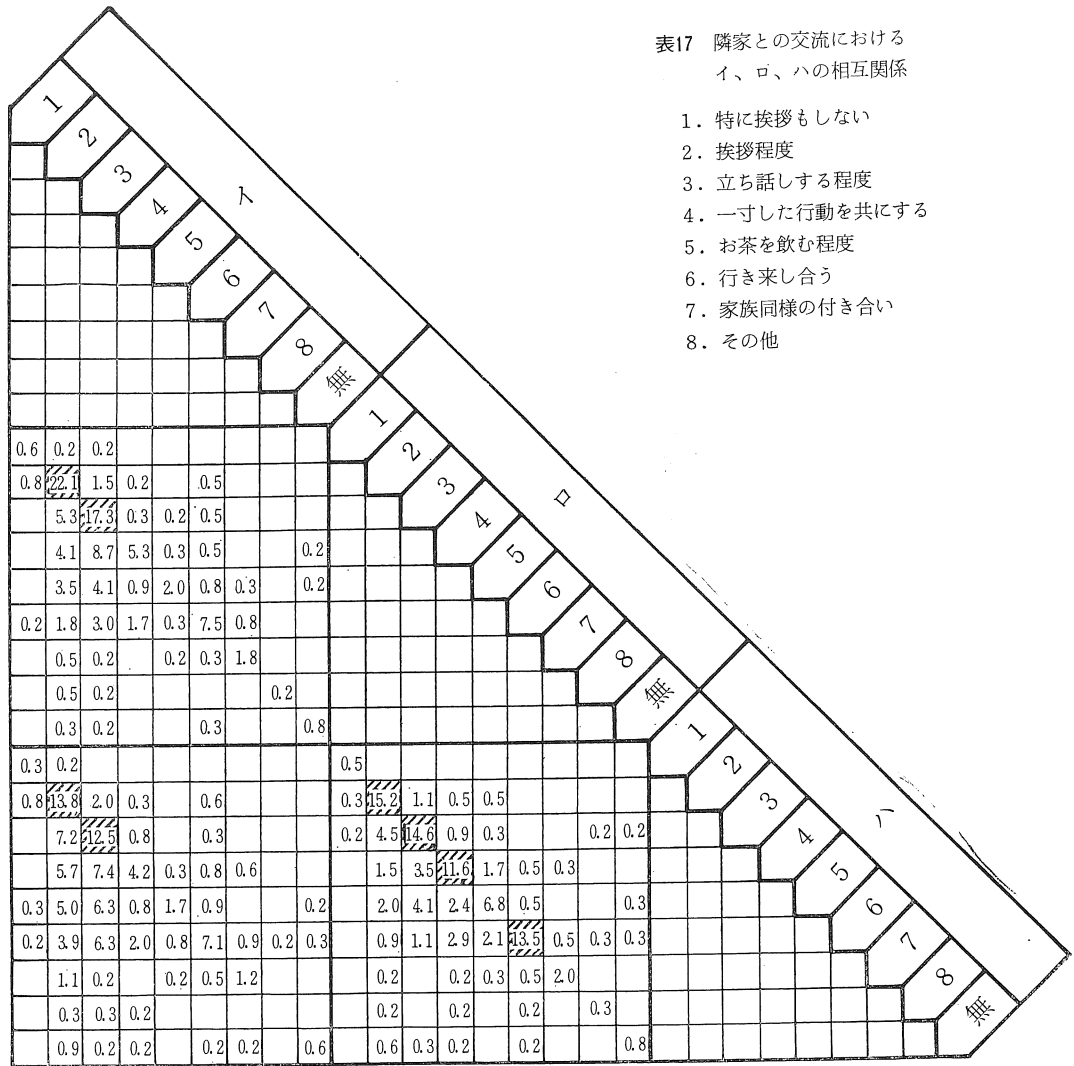


表17 隣家との交流における
イ、ロ、ハの相互関係

1. 特に挨拶もしない
2. 挨拶程度
3. 立ち話する程度
4. 一寸した行動を共にする
5. お茶を飲む程度
6. 行き来し合う
7. 家族同様の付き合い
8. その他

が実行できないと思われる。

4. ま と め

以上のことを要約すると、家族員間相互の独立と交流の両面を希望する反面、両親や隣家との交流はあまり望んでいないと思われるが、現状では、住宅の確保が優先されるため、いやおうなく決定づけられた家族形態・住居規模・形式などにより、充分満足していないと推察出来る。しかし、これらの独立・交流への要求は、配置計画・平面計画・室の雰囲気などへの配慮によりかなり満たすことができるのではないかと考えられる。

以上住宅における任意意識調査より、2点について結果の概要を報告した。

おわりに、回答をいただいた各位、アンケート用紙の

配布、回収にご協力いただいた本学建築学科学生に深く感謝いたします。

—参考文献—

*経済企画庁編 昭和45年国民生活白書
 **中島一, 松本壮一郎「住宅における任意意識調査(第1報)」
 日本建築学会東海支部研究報告集 第8号 昭46.6
 ***中島一, 松本壮一郎「住宅における住宅における任意意識調査(第2報)」
 日本建築学会大会学術講演梗概集 昭46.11
 ****名古屋市「名古屋の住宅(昭和43年住宅統計調査結果)」 昭45.2.20.